企画書

チベット難民ドキュメンタリープロジェクト Vol.1

チベット難民

ー世代を超えた闘いー

田中 邦彦

kuni@10system.com / kunihimali@hotmail.com
www.10system.com

August 1999

主題概要

主題背景

中国共産党政府がチベットを侵略し統治を開始した１９５０年代から、チベット難民はインドやネパールなどの諸外国において彼ら独自の文化的アイデンティティーを保持するために奮闘し続けている。１９８９年度ノーベル平和賞受賞者でもある チ ベット人達の精神・政治的指者・ダライ＝ラマ十四世の指導の下、多くの難民達が異国の地で何百という僧院・尼僧院を建立しながらチベット仏教に基づいた伝統的かつ文化的な独自性（アイデンティティー）を保持に努めている。しかしなが ら異 国での難民生活は貧窮が伴い、チベットでは当然のように存在していた「僧院共同体」を殆ど維持できないでいるのが現状だ。

更に、難民第三世代、即ち亡命先で生まれ育った若者達はチベット人のアイデンティティーを見失いがちである。　第一・第二世代の難民達がチベットを母なる大地（故郷・祖国）として崇敬し帰郷するために苦闘し続ける一方で、先の見えない不安の中、多くの第三世代の若者達がチベット人のアイデンティティーを見失い、挙句にはその独自の仏教文化を軽視する傾向 さえ見受けられる。　加えて、インドやネパールのような難民受入先の国で彼らの多くが商業主義文化を積極的に受 け入れ同化している。彼らは、しばしばチベット仏教文化よりもハリウッド映画・ロックミュージック・英会話などをより好む。 即ち、 現在チベット難民はその文化的独自性（アイデンティティー）を維持し続ける上で二つの大きな困難に直面している。 それ は、中国共産党政府によるチベット統治とアメリカをその本源とする商業主義文化による"侵略"とである。

ドキュメンタリー企画

今回、私はインド・ネパールのチベット難民、特にその第三世代を焦点とするドキュメンタリーを制作します。中国共産党政府によるチベット侵略・統治が本格的に始まり、ダライ＝ラマ十四世がインドへ亡命を余儀なくされた１９５９年から今年１９９９年３月で４０周年。その間、多くの難民達が異国の地で生まれ育っている。すなわち、難民第三世代である。第三世代 は 、チベット独自の文化を維持し続けていく上で重要な存在であるにもかかわらず、チベットについてのドキュメンタリーでは、その存在はあたかも忘れ去られたかのようだ。「ダライ＝ラマ」或いは「チベットの神秘」などのドキュメンタリーが数多く制作される一方で、第三世代の存在がマスメディアの中で取り上げられることは殆どない。従って、このドキュメンタリーを通じて、「チベット問題」が行き詰まる状況の中で第三世代の若者達がどの様にチベット人特有のアイデンティティーを失いつつある のか或いは保持しようとしているのかを描き出すつもりです。　「アイデンティティーを巡る若者達の奮闘」を焦点にした
このドキュメンタリーは、チベット難民がアイデンティティーを維持していく上でチベットが如何に必須の場であるのかを教えると共 に、視聴者自身
すなわち我々自身のアイデンティティーの問題に光明を投じるでしょう。

経費

必要経費は３００万円です。

個人資格

企画発案者・ディレクター田中邦彦は、現在ビデオジャーナリスト。カンザス大学大学院ジャーナリズム学部の卒業生で ある。田中は日本・アメリカのテレビ局に所属しながら幅広い取材活動を行ってきた。特にチベット・ヒマラヤ地域に精通している。

重要事項

チベット仏教文化

七世紀初頭に仏教がインドからチベットに伝来してから、その仏教は土着宗教であるボン教と徐々に結びつき、ここにチベット独自の仏教、チベット仏教が生まれた。　この仏教はしばしば「金剛乗仏教」と呼ばれ、小乗・大乗仏教と共に三大仏教の一つに数えられている。チベット人の生活・アイデンティティーは主としてこの仏教に基づいている。かつては、チベットの村村の至る所に僧院が見られ、大きな寺院は"門前町"を形成していた。通常、チベット人達の家々には仏像が置かれ、人々は仏教に深く帰依していたのだ。つまり、チベット人達はその仏教に深く根づいた独自の社会の中で１２００年以上暮らし続けていた。　加えて、１９５０年代以前、チベット民衆は、政治・精神的リーダーである歴代ダライ＝ラマ達を観音菩薩の化身として崇敬し３５０年以上に渡って調和的社会を共に築き上げていた。しかし、中国共産党政府がチベットの本格的侵略・統治を開始した１９５９年以来、仏教的価値観は完全に否定されチベットの仏教社会は破壊され続けている。

チベット難民

中国共産党政府は１９５９年からチベットを統治し続けている。　彼らの言い分はこうだ。「チベットは古来より中国の一部である」。しかしながら法律家国際委員会の法調査部に拠れば、中国の主張はなんら歴史的な証拠に基づいていない。　反対に、様々な歴史的資料は、チベットは中国の一部などでは無くれっきとした自治国家であったことを証明している。１９５９年から１９６５年にかけて「チベット問題」は国連総会の場で何度も議論され三つの決議が採択された。　決議書は中国政府によるチベット人の人権侵害を厳しく非難し、チベット人の民族自決権を含む諸権利を尊重するよう要請した。　しかし、中国政府はその決議を無視し続けている。　しかも、「チベット問題」解決の

ためにダライ＝ラマ十四世が幾度も具体的な提案を掲げ対話を呼びかけているにも拘わらず、共産党政府は飽く迄も拒絶の構えだ。

アムネスティーインターナショナル，レフュジィーインターナショナルなどの国際的なＮＧＯ（非政府組織）によれば、チベット総人口の五分の一に当たる１２０万人が中国政府の圧政のためにこれまでに亡くなっている。又、未だに多くのチベット人達が「政治犯」として牢獄や強制収容所で惨めな生活を強いられている。６０００以上もの寺院、僧院、歴史的建築物が過去数十年の間に破壊された。文化大革命時の破壊の規模は特に凄まじかった。ダライ＝ラマ十四世がチベットの首都であるラサを離れインドへと亡命した１９５９年以来、計１０万人ものチベット人達がヒマラヤ山脈を徒歩などで越え、インド或はネパールの難民居住地へと避難している。同伴者のいない幼い子供達を含む多くの難民が逃避行中に様々な苦境に直面している。ヒマラヤ山脈での凍傷に加え、中国或はネパールの国境警備隊によるレイプ、強制逮捕、虐待などの被害に遭うこともしばしばである。 アメリカ難民委員会が発行した１９９６年度版の「世界難民調査」によれば、このような困難の下、１９９５年中２０７６人のチベット難民がネパールの首都・カトマンズにたどり着いている。

１９９６年度版「世界難民調査」によれば、約１３万人のチベット難民がインドとネパールで生活している。その至る所で、多くの難民達は「商業主義」に戸惑いながらも経済的貧窮状態からの脱出に懸命だ。一方、難民達は異国の地で僧院・尼僧院を建立しながらチベット仏教に基づいた伝統的かつ文化的な独自性（アイデンティティー）を献身的に維持しようとしている。しかし、「成功物語」が存在する反面、大半の僧院は殆ど"生き延びる"ことが出来ないでいる。それは、チベットでは当然のように行われていた地域社会からの安定した援助を受けられないからだ。即ち、外国での難民生活は常に貧窮が伴い、自分達の生活を維持していくだけで手一杯なのだ。　非政府組織のレフュジィーインターナショナルに拠ると、インドにおけるチベット難民の平均年収は約４００USドル（約４万７千円）（１９９０年）。　その状況は、ネパールでも同様である。

第三世代

難民としての厳しい状況下、ダライ＝ラマ十四世を含む多くの第一・二世代の難民たちは一貫してチベットを「母なる大地」・「祖国」として崇敬している。そして、仏教の教えに基づきながら、チベットへ戻るために継続的に非暴力運動を展開している。一方、「チベット問題」が停滞する中、難民、特にインドやネパールなどの"他国"で生まれ育った第三世代の若者たちの多くは、チベット人のアイデンティティーを保持しようとする老世代の関心事を殆ど共有できないでいる。しかも、難民として彼らは未来に対しての明確な見通しを持つことが出来ない。その結果、多くの者が長期にわたる非暴力闘争に失望し、第一・二世代の行い祖国チベットそして仏教に基づく伝統文化への感情的且つ宗教的結びつきの助長に共感し自らそれに努めるよりは寧ろ中国政府への憎悪に関連する愛国感情を単純に表明しがちだ。同時に、商業主義文化、特に、アメリカ合衆国に由来する大衆文化に第三世代は魅了されている。即ち、日常生活の中で彼らはチベット人としての文化的独自性（アイデンティティー）を失いつつ、その大衆文化に染まる（同化）傾向にある。こうして、異国の地でチベット仏教文化は徐々にアメリカ大衆（商業主義）文化にとって代られようとしている。

『チベタンナショナリズム』（１９９２年）の著者・クリスチャン＝キリンガーは若者達の文化変容の典型をこう表現している。「....２０代半ば、大規模な難民居住地で育つ.....彼は英語の流暢さが求められる中等教育を終了し...通俗的西洋音楽を好み、"ランボー"や"チャック＝ノリス"の映画ファンだ」インドに住むある若いチベット難民は最近こう語った。「我々は我々の未来がどこにあるのか全く見当がつかい！」彼の鬱積し苛立った言葉はチベット人のアイデンティティーに関わる主要な難問を示し、且つ、私のドキュメンタリーの主題を明確に表現している：第三世代はどのように彼らのアイデンティティーを保持するつもりなのか。伝統文化、難民共同体、異国文化そして世界市場の狭間で、彼らは如何に奮闘しているのだろうか。

企画描写

１．目標

チベット難民第三世代のアイデンティティーを巡る奮闘を焦点として、「チベット問題」に対する日本・他国の認識を促進する。

２．目的

２－１．視聴者

＊（視聴者に）チベット難民に関する情報、主にチベット人の文化的歴史と中国共産党政府によるチベット の侵略・統治を伝える。
＊（視聴者に）チベット難民の様々な世代・第三世代の若者達の活動を紹介することによって、難民達の様々な様相・苦境を伝える。

２－２．地域社会

＊ それぞれの地域住民の文化・政治状況そして「チベット問題」に関する知識の度合を考慮しながら、セミナー・講習会を通じてチベット難民の苦境を理解するために必要な情報を提供する。

＊ チベット難民が独自の文化を維持していくために如何に格闘しているのかを個別に学習して頂くために、ドキュメンタリーのコピー（テープ）を個人・団体に販売する。

３．取材対象

- チベット難民政府：（国際関係情報部、ダライラマ個人事務局、その他）
- チベット難民居住地：(ダラムサラ｛インド・ヒマチャル州｝／カトマンズ、ポカラ｛ネパール｝)

- チベット非政府組織：(チベット青年会議、チベット国民民主党、その他)
- チベット寺院：(ナムギャル寺院など)
- 平和活動：（ピースマーチ、ハンガーストライキ、決起集会、etc. ）
- 世代別難民：（第一、第二世代｛チベットから移住｝＆第三世代｛他国で生育｝）

４．発表・取材方法

このドキュメンタリー企画は「目的」に応じて以下の内容を含みます。

- ■ 各国主要テレビ局用の日本語・英語版のドキュメンタリー（５０分)。
- ■ チベット難民をサポートする団体、及び、各国教育機関（大学など）用の教育ビデオ。
- ■ 各教育団体・ＮＧＯ主催のドキュメンタリーを使用してのセミナー・講習会。

プロジェクトの準備は、広範囲に及ぶ「チベット問題」に関する文献・文書などの調査・研究によって行われました。ルポ（取材） の方法は、 アメリカで始まり日本でもようやく市民権を得つつある「ビデオジャーナリズム」を採用しました。ジャーナリストが単身で高性能小型ビデオ カメラを駆使して取材するというこの方法は、テレビ局従来の"分業"（多数のメンバー構成）スタイルとは著しく異なる方法です。取材相手 に余計なプレッシャーを与えない（特にインタビューの際)、敏捷性に富む、取材費用が余り掛から ないなど、様々な利点が有ります。その 結果、表面的では無い突っ込んだ取材が可能となるのです。

インド・ネパールでの取材（１９９９年２月_５月）は、難民達の印象深い様々な映像を取得して完了しました。 それは主に_以下の様な内容です：平和行進（ピースマーチ)、ハンガーストライキ、第三世代の活動、世代別インタビュー、そして、ダライ・ラマ１４世との単独会見などです。ナレーションの原稿はほぼ完成しています。コンピューターによるデジタル編集（ノンリニア編集）は十分な資金が集まり次第、日本で開始します。

・「ビデオニュースインターナショナル」の社長・マイケル＝ローゼンブラム氏も「ビデオジャーナリズムは低コスト によって高品質のジャーナリズムを生み出している」と高く評価している。

５．取材スタッフ

田中 邦彦 は、現在ビデオジャーナリストです。カンザス大学大学院ジャーナリズム ・マスコミュニケーション学部にて社会学修士を取得しました。合衆国での三年間、リポーター兼カメラマンとして KUJH-ＴＶに所属。渡米前、田中は日本のテレビ局（ＴＶ朝日・ＮＨＫ）で働いていました。これまでに、田中は広範囲に渡るニュース やドキュメンタリー番組の取材・制作に携わっています。以下が主な例です。

- ✧ バングラデッシュのサイクロン災害（１９９１年７月）
- ✧ ソビエト連邦のクーデター（１９９１年９月）
- ✧ イラクでの湾岸戦争検証（１９９１年１２月）
- ✧ 中国・三峡でのアジア人ジャーナリスト会議（１９９２年９月）
- ✧ ネパール・タカリー族の大祭（１９９２年１２月/１９９３年３月）
- ✧ ネパール・タルー族の生活（１９９３年３月）
- ✧ 深田久弥の日本百名山（１９９４年６月１１月）
- ✧ ネイティブアメリカンの文化・環境問題（１９９７年１２月）

田中はチベット・ネパール・インドに精通しています。１９８７年に単独でチベットを旅し、これまでに５回ネパールを訪れチベット難民居住地に幾度も足を運んでいます。又、今回の企画に対して、多くのチベット人・インド人・ネパール人の賛同をも得ています。

６．ドキュメンタリーの簡潔内容（仮内容）

ＰＡＲＴ **1**：「チベット難民の苦境」

- ✧ 中国共産党政府による侵略
- ✧ チベットの文化・仏教
- ✧ ダライ＝ラマの非暴力闘争
- ✧ チベット難民の生活状況

ＰＡＲＴ ２：「チベット難民の最近の活動」

- ✧ 「自治権」獲得のためのダライ＝ラマ十四世による「中道政策」
- ✧ 「完全独立」獲得を目指すチベット青年会議の活動
- ✧ デリー（インド）での死を賭けた「ハンガーストライキ」（１９９８年）
- ✧ 世界に「チベット問題」を気づかせるための平和行進などの様々な活動

ＰＡＲＴ ３：「チベット難民第三世代」

- ✧ 日常生活、仕事、家族、その他
- ✧ 特別活動。政治、その他
- ✧ 社会問題、飲酒、麻薬、ＡＩＤＳ、その他
- ✧ 主要登場人物_俗人・僧侶

ＰＡＲＴ ４：「長老・年長者」

- ✧ 第一・二世代の生活と第三世代への思い
- ✧ ダライ＝ラマ十四世のインタビュー

ＰＡＲＴ ５：「未来・希望」

- ✧ 第三世代の夢
- ✧ 長老の願い （ダライ＝ラマ十四世の願いを含む）

結 び

ダライ＝ラマ十四世は彼の著作の中でチベット人についてこう述べている。「彼らの苦しみは終わっていない。その苦しみは、中国共産党政府がチベットを去るか、さもなくば人種或いは宗教共同体としてのチベット人達が この世からいなくなるまで続くのだ」

第三世代の若者達は、チベット民族がチベット仏教に基づくチベット人独自の文化そしてアイデンティティーを保持していく上で重要な存在です。　今回のドキュメンタリーを通じてこの世代を紹介する事によって、多くの視聴者が一層チベット難民の苦境に関心を示して下さり、その上チベット人たちの文化保持が世界における文化の多様性に貢献する事が出来るのだと認識して頂ける事を切に願っております。

（付録）：何故今「チベット問題」、それも第三世代なのか

１．重要人物

「チベット問題」での第三世代の役割はチベット青年会議（ＴＹＣ）を中心として年々拡大しています。「暴力」的活動をも容認するＴＹＣの方針は、ダライ＝ラマ十四世の政策・「中道・非暴力主義」と対立している。更に、ダライ＝ラマが中国政府に対して「自治権」のみを要求するのに対して、ＴＹＣは一貫して「完全独立」を主張。チベット難民政府はあくまでも「非暴力主義」・「自治権」のポリシーを貫く構えだが、日本・ネパールなどのダライ・ラマ法王代表部事務所或いはチベットサポートグループに拠れば、ＴＹＣの主張を支持する潜在的なチベット難民はかなりの数に上る。１９９８年４月にＴＹＣが組織したデリー（インド）での命を賭けたハンガーストライキは世界各地で反響を呼んだ。全世界に会員を有するＴＹＣの活動は欧米のメディアを中心に少しづつ注目されつつある。　チベット人の政治・精神的支柱であるダライ＝ラマ十四世の高齢を考える時、ＴＹＣを核とする「第三世代」の存在は「チベット問

題」の中で一層注目を受けてしかるべきだと思います。

２．文化的独自性

これまでに幾つかの英文リーポート（特に文化人類学関連）を通じて、チベット難民、特に、「第三世代」の文化的 変容（cultural assimilation）が伝えられています。外的要因によって変化していく彼らの様子は、北米ネィティブアメリカンの辿った道筋を容易に想起させる。第三者から見れば、少数民族の文化的変容など「珍しくも無く、当然」の事なのでしょうが、当事者にとっては徒ならぬ事なのです。私が出会ったチベット人の長老達は、「第三世代」が仏教の教えに余り興味を示さず、仏教に基づく伝統的な生活・文化を蔑みつつ商業主義文化に染まっていくことを嘆いていました。この嘆きは、三年間の滞米中に知り合ったネィティブアメリカン（ＮＡ）の長老達にも共通するものです。　あるＮＡの長老は語ってくれました。「その場所が無ければ若者達に本来のアイデンティティ ーを理解・認識させることは困難だ」ＮＡにとっての「場」とは先祖が守り続けてきた「聖地」であり、そしてチベット人にとってのそれは母なる大地・祖国としての「チベット」なのです。両者の世代断絶を目の当たりにした者として、とてもこの状況を看過することは出来ません。世界各地で民族紛争・環境問題が多発し文化の多様性が注目されている今こそ、改めて「文化的独自性の保持」の問題を次世紀の担い手である若い世代を通じて考えてみる必要があるのではないでしょうか。「チベット問題」は絶好の題材です。

３．日本社会との類似点

チベット難民としての厳しい境遇の中で第三世代の若者達が「自分は何者か」を模索する姿は、商業主義・センセーショナリズム（扇情主義）のマスメディアから絶えず流される「トラッシュ（"がらくた"情報）」によってアイデンティティーを喪失しつつある日本の若い世代に聊かの自省を促すかもしれません。次世紀を目前にした日本社会では現在、「君が代・日の丸」・「学校崩壊」・「援助交際」・「地域社会・共同体の再構築」など様々な面から日本人のアイデンティティーが問われています。だからこそ今、アイデンティティーを探し求めるチベット難民の若者達を焦点とするドキュメンタリーを提供する意義があると

考えます。

４．日本メディアの傾向

ある日本人ジャーナリストが語った様に「チベットのことを色々な角度から掘り下げていくことはとても大切なこと」だと私も思います。しかしながら、メディア、特に日本のマスメディアは様々な角度からチベットを掘り下げていると言えるでしょうか？ お気づきの様に、その取材・番組は文化・宗教・自然に著しく偏っています。そして、その多くは単なる「紹介」の域を出ません。さて、現在、世界的な話題になりつつある「チベット問題」はどうでしょう？この問題をきちんと且つ詳細に取り上げた日本の報道・番組が今までにありましたか？私は知りませんし、実際無いのです。これは明らかに日本のマスメディアが中国政府に気兼ねをして、その問題を黙殺している表れだと考えます。結果として、日本の国民は「チベット問題」のことを（それがアジアで起きている問題にもかかわらず）殆ど知りません。民主主義社会において「国民の知る権利」を満たすというメディアの役割を放棄する日本メディアの実態を皆様はどの様に御感じになりますか？　この、ジャーナリズムの責務を放棄した日本の報道機関の傾向を観察していて、あるネイティブアメリカン（ＮＡ）の 長老の話を思い出しました。１９６０年―７０年代を通じて多くの文化人類学者達がＮＡのコミュニィティー（居留区）を訪れ、彼らの文化・宗教・伝統生活などを論文などを通じて発表したそうです。しかしながら、それにはＮＡの悲惨な生活状況を伝える現状報告は殆ど無かったそうですし、その文化人類学者達がＮＡの生活改善・文化保護のために具体的な行動を起こすことも又無かったそうです。　日本のマスメディアのチベットに対する姿勢はこれに酷似していませんか。

１９９８年１１月、ダライ＝ラマ十四世が訪米しクリントン大統領と会見しました。これは間違い無くニュースバリューの高いものです。従って、世界の著名な新聞・雑誌・ＴＶはこれを当然リポートしました。一方、日本のメディアは（私がチェックした限りでは）朝日新聞が簡単に取り扱っていただけで、他は黙殺。影響力の有るＮＨＫの夜７時・９時のニュースも然り。「チベット問題」はアジアの重要問題です。何故、欧米のメディアに先行されねばならないのでしょうか。チベット難民達から「何故、日本の政府・メディアはチベッ

ト問題に対してだんまりを決め込むのですか？」と訊かれる度に情けない思いをしています。

５．企画の意義

以上のことから、この企画は単に私の個人的な思い入れからの発想ではなく、多様な理由によって支えられていると私は考えます。チベット"自治区"における中国共産党政府による組織的かつ継続的な文化的虐殺の現状とあるチベット難民の言葉の意味とを熟考する時、「何故今、第三世代なのか？」ではなく「やはり、今こそ第三世代」なのだと思わずにはいられません。

「祖国がないということは、有る意味では人間であって人間ではない感じがする…何より自分のよって立つ所がどこにもないのだ」

#　　#　　#